

通り浦遺跡 II

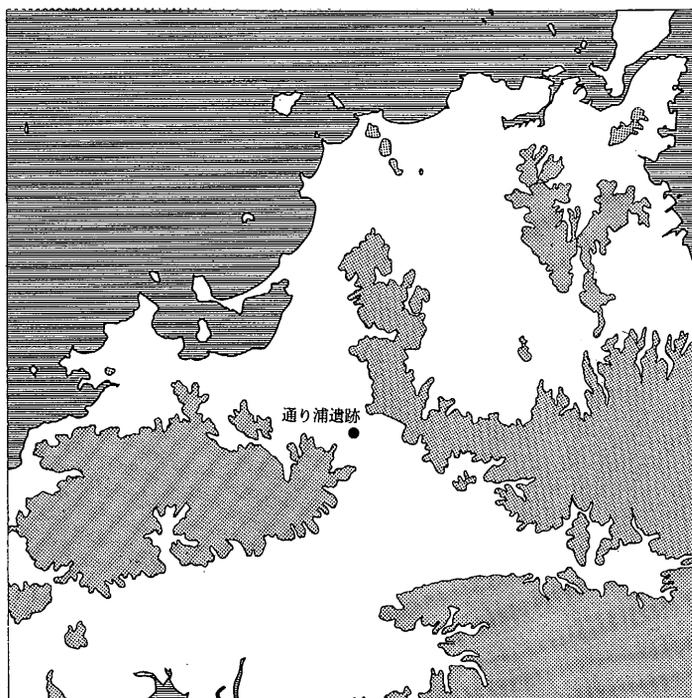
筑紫野市文化財調査報告書

第 24 集

1990

筑紫野市教育委員会

とお^とり^り うら^うら^ら 浦^う 遺^い跡^せ II



序

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中央に位置します。東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野をもつ当市は、太古から交通の要衝として栄えてまいりました。今日までの発掘調査でも中国製の青銅器や陶磁器などが発見され、市の北部は大宰府条坊の一部だったようです。この大宰府から豊前へ通じる官道も当市を通り、近年の発掘調査では万葉集に詠まれた蘆城駅家の跡と思われるものも発見されました。江戸時代においても長崎街道、博多街道が通り、筑前六宿に数えられる原田宿、山家宿がありました。そして今日、九州縦貫自動車道、国道3号線、同南バイパス、国道200号線、同冷水バイパス、国道386号線、筑紫野市-鳥栖有料道路、JR 鹿児島本線、JR 筑豊本線、西日本鉄道大牟田線が通っています。ここに現在6万余の人々の暮らしがあり、その数は年々増加しております。

福岡が日本におけるアジアに開かれた門戸と位置づけられるならば、筑紫野市は九州におけるクロスロードと言えましょう。このような歴史に育まれた当市には、たいへん多くの遺跡があります。そして大規模な開発から小規模な建築まで、多種多様の工事が実施されています。今日的な人々の営みのなかで、後世に伝えて行くべき義務を負う文化財を保護するため、さらに努力を重ねる所存でございます。

最後になりましたが、脇山靖臣氏、また地元の皆様のご理解とご協力につきまして、衷心よりお礼申し上げますと共に、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

平成2年3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 永 渕 正 敏

例 言

1. 本書は共同住宅建設に伴い、筑紫野市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、脇山靖臣氏と埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、実施した。
3. 現地での発掘に係る実測・写真撮影は奥村俊久が担当した。
4. 出土遺物の実測は土器を森部順子が主に行い、石器については奥村が実測した。
5. 製図は森田くみ子が行った。
6. 石器の素材については唐木田芳文のご教示を受けた。

目 次

I 調査に至る経過	1 頁	5. 1号建物跡	8 頁
II 位置と環境	1	6. 1号土壌	9
III 調査の内容	4	7. 1号溝状遺構	9
1. 調査概要	4	8. 2号溝状遺構	9
2. 1号住居跡	4	9. ピット	9
3. 2号住居跡	4	IV 小 結	10
4. 3号住居跡	6		

挿 図 目 次

第1図 通り浦遺跡周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）	2 頁
第2図 通り浦遺跡第2地点周辺地形図（縮尺1/2,500）	3
第3図 通り浦遺跡第2地点遺構配置図（縮尺1/100）	折り込み4/5
第4図 2号住居跡実測図（縮尺1/60）	5
第5図 2号住居跡出土土器実測図（縮尺1/3）	6
第6図 2号住居跡出土石器実測図（縮尺1/2）	6
第7図 3号住居跡実測図（縮尺1/60）	7
第8図 3号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）	7
第9図 1号建物跡実測図（縮尺1/60）	8
第10図 1号土壌実測図（縮尺1/30）	9
第11図 溝状遺構・ピット出土土器実測図（縮尺1/3）	9

I 調査に至る経過

平成1年2月27日、太宰府市の脇山靖臣氏から開発行為等協議届書が筑紫野市都市計画課に提出された。この協議書に基づく事前協議で、筑紫野市教育委員会は申請地が周知の遺跡である通り浦遺跡の範囲内にあることを説明した。同年3月27日、同氏より教育委員会に文化財の有無について照会がなされ、教育委員会では4月6日に試掘調査を実施した。この結果、弥生時代中期と推定される住居跡等が検出され、その旨を回答した。試掘調査結果を基に双方で協議した結果、発掘調査による記録保存措置を取ることとし、筑紫野市が発掘調査を同氏から受託することとなり、平成1年5月11日に発掘調査委託契約書を締結した。発掘作業は5月24日から調査を開始し、6月12日に終了した。

調査組織	総括	筑紫野市教育委員会	教育長	永淵正敏
	庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課 課長	川原孝之
			社会教育課 文化財係 係長	山野洋一
				主事 奥村俊久
	発掘調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課 文化財係 主事	奥村俊久

II 位置と環境 (第1・2図/図版1)

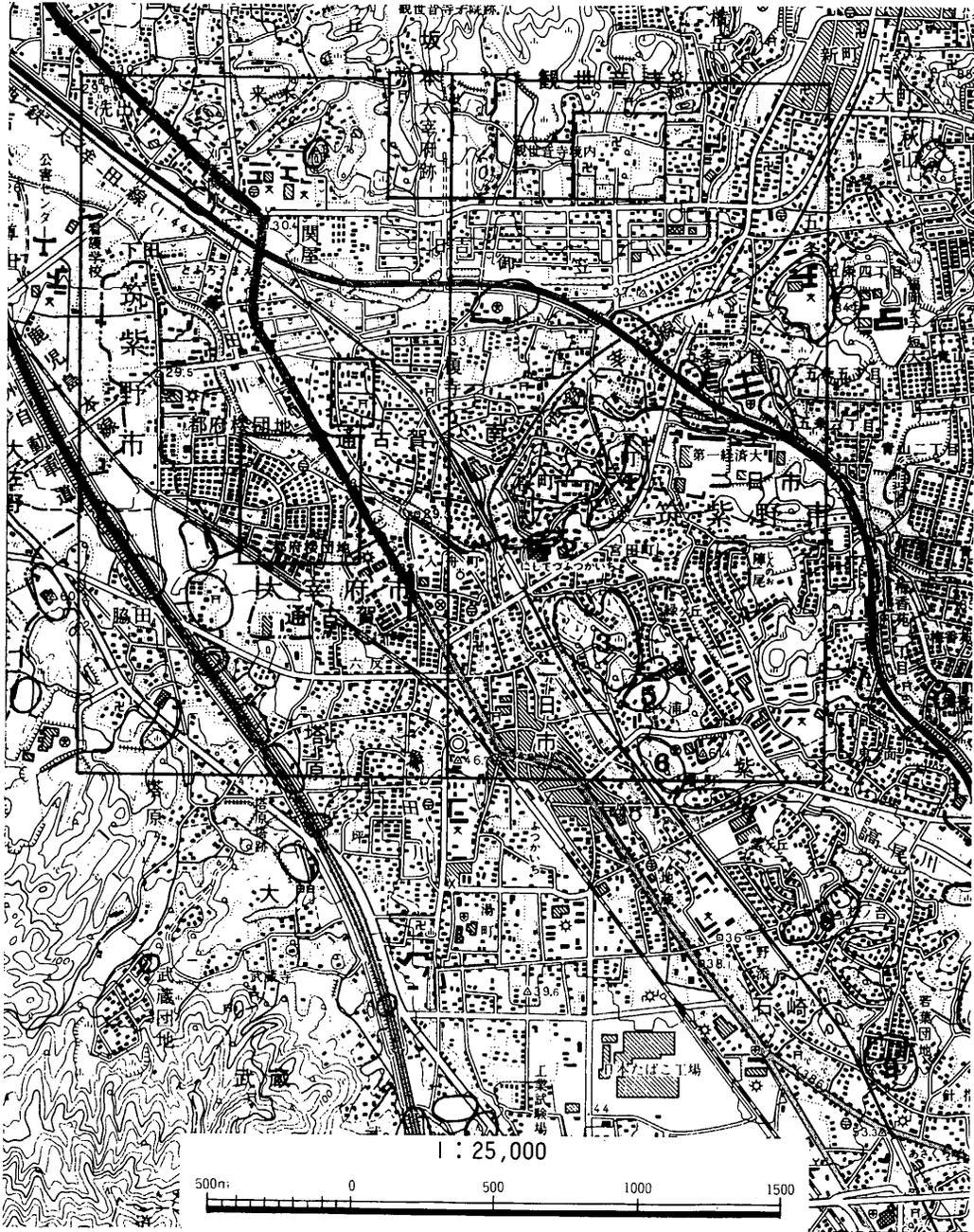
筑紫野市は福岡市の南19kmに位置する。東から三郡山塊、西から背振山塊が迫り、その間に福岡平野と筑紫平野とを結ぶ狭長な平野部を有す。この平野は北部九州沿岸部から九州内陸部への重要なルートで、古代から交通の要衝であった。

平野の東側は、宝満山から派出した山稜が延び、山稜は大きく開析されて幾つかの丘陵を形成している。丘陵上には通り浦遺跡を始め多くの遺跡が所在する。通り浦遺跡は平野部を見下ろす西端の丘陵にあり、昭和48年7月に遺跡の南端部分の発掘調査を実施し、弥生時代前期の甕棺墓と同後期の住居跡等を検出した。この地点を通り浦遺跡第1地点とし、今回の報告部分を通り浦遺跡第2地点とする。また鏡山猛氏の推定によると通り浦遺跡もほぼ大宰府の郭内に入る。^{註2}

註

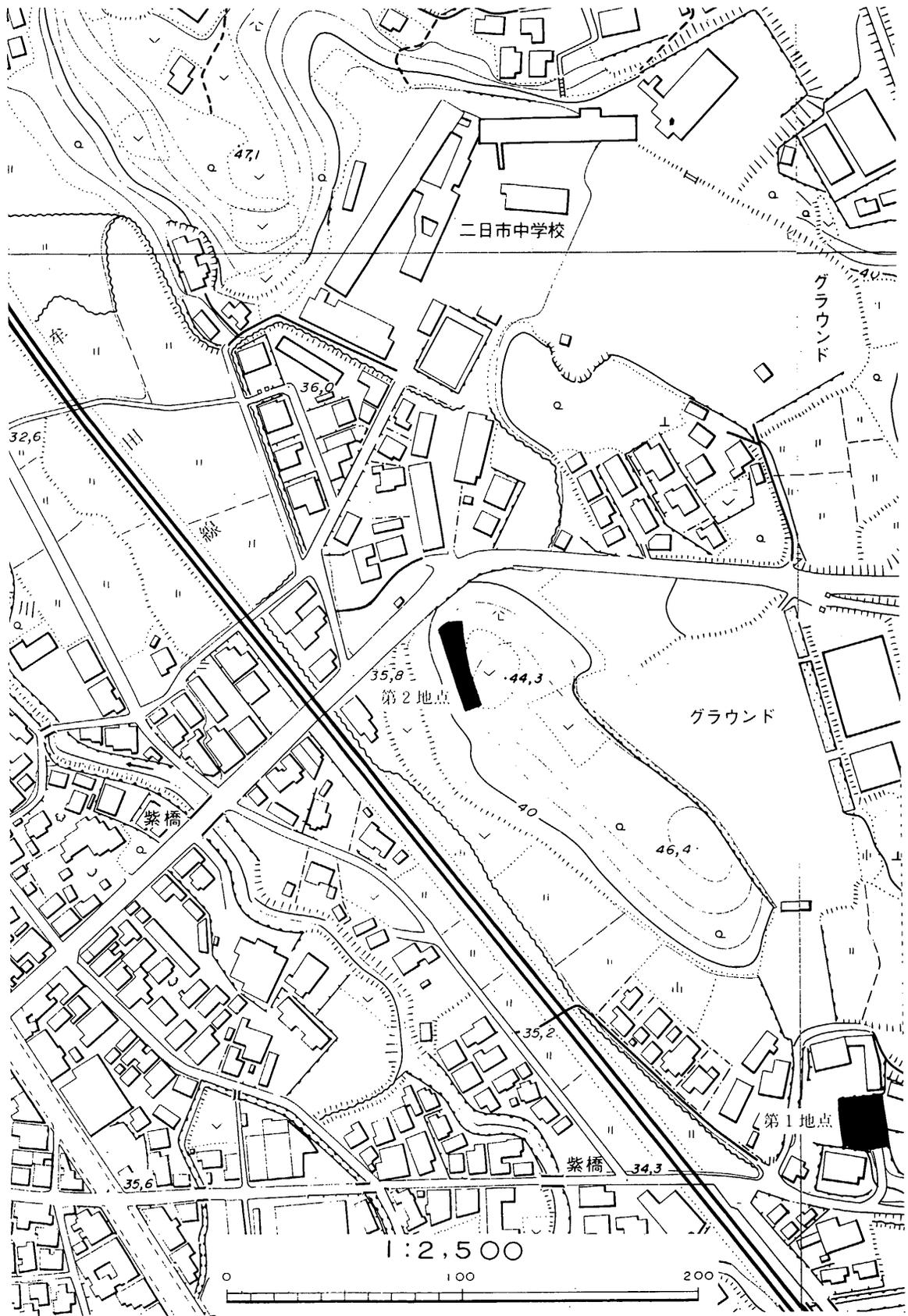
註1 「通り浦遺跡・剣塚遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第10集 筑紫野市教育委員会 1984

註2 「大宰府城郭の研究」鏡山 猛 1928



第1図 通り浦遺跡周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

- | | | |
|----------------|----------------|----------|
| 1. 第一経済大学敷地内遺跡 | 2. 峯遺跡 | 3. 峯畑遺跡 |
| 4. 修理田遺跡 | 5. 二日市中学校校庭内遺跡 | 6. 通り浦遺跡 |
| 7. 五穀神山遺跡 | 8. カケ塚遺跡 | 9. 針摺遺跡 |



第2図 調査区周辺地形図 (縮尺 1/2,500)

Ⅲ 調査の内容

1. 調査概要（第3図／図版2）

通り浦遺跡第2地点は、遺跡の北端部分の西側に位置する約350㎡である。緩やかな斜面を段状に平坦面を作り出してあったため、頂部側の遺構の残りは悪い。主な遺構としては円形プランの竪穴式住居跡2軒、方形プランを呈すと推測される竪穴式住居跡1軒、掘立柱建物1棟、溝状遺構2条、その他土壌及び、ピットが検出された。

2. 1号住居跡（図版3）

調査区南隅で竪穴式住居跡のコーナー部分を検出した。プランは明確ではないが、方形を呈すものと思われ、壁高は40cmほどを測る。

遺物

弥生式土器の小片のほか、砂岩製の偏平な砥石状の磨石が出土した。

3. 2号住居跡（第4図／図版3）

調査区のはぼ中央で検出した円形プランを呈す竪穴式住居跡である。直径は約7mを測るが、西側の壁体は失われる。壁高は最大20cmほどが残る。中央には210×130cmの土壌が設けられる。この土壌の両端部にはピットを有し、その間は更に一段深く掘り窪められる。柱穴は立て替えが想定され、壁体から1mほど内側に5本並びに6本の柱穴が巡る。

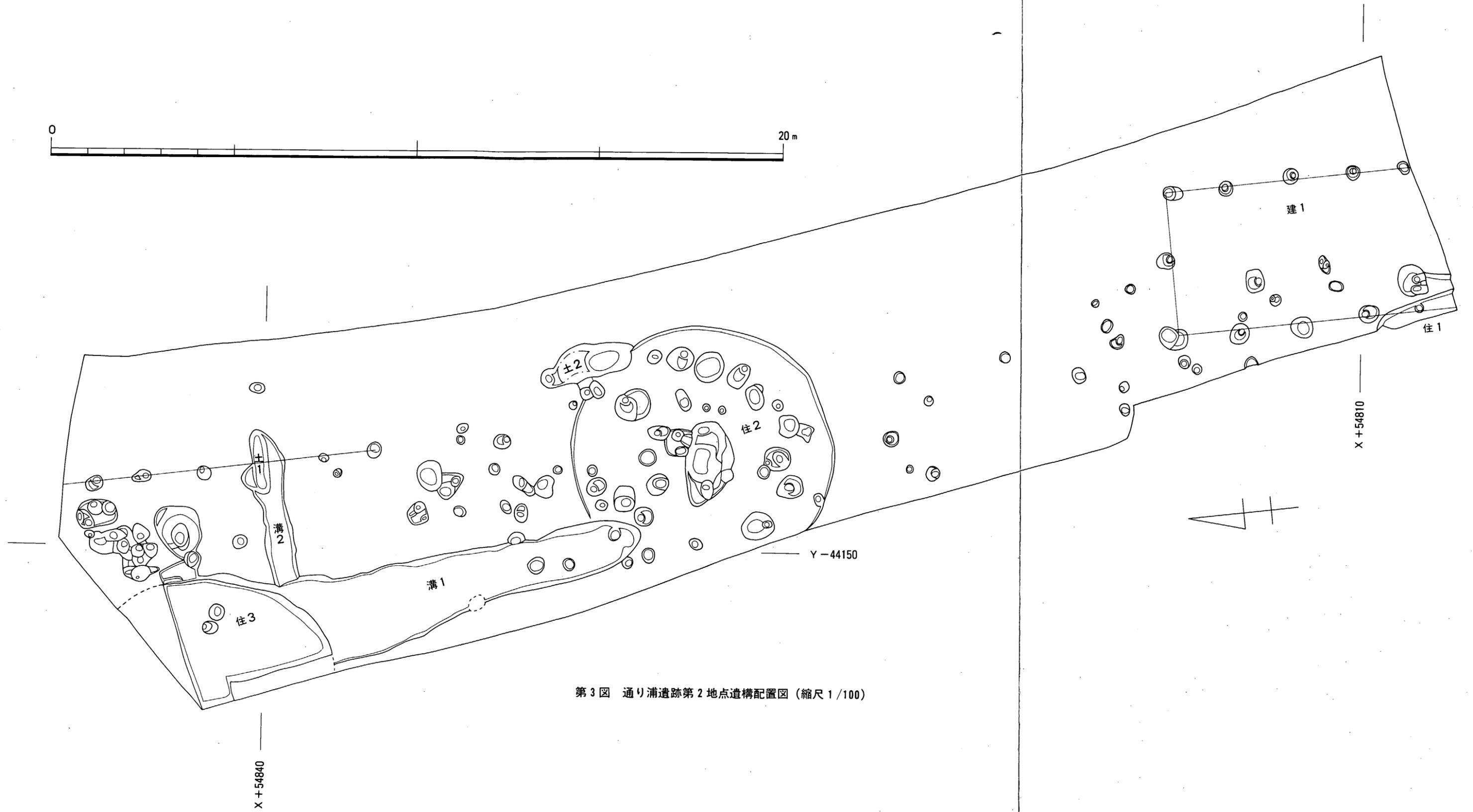
遺物

(1) 土器（第5図／図版5）

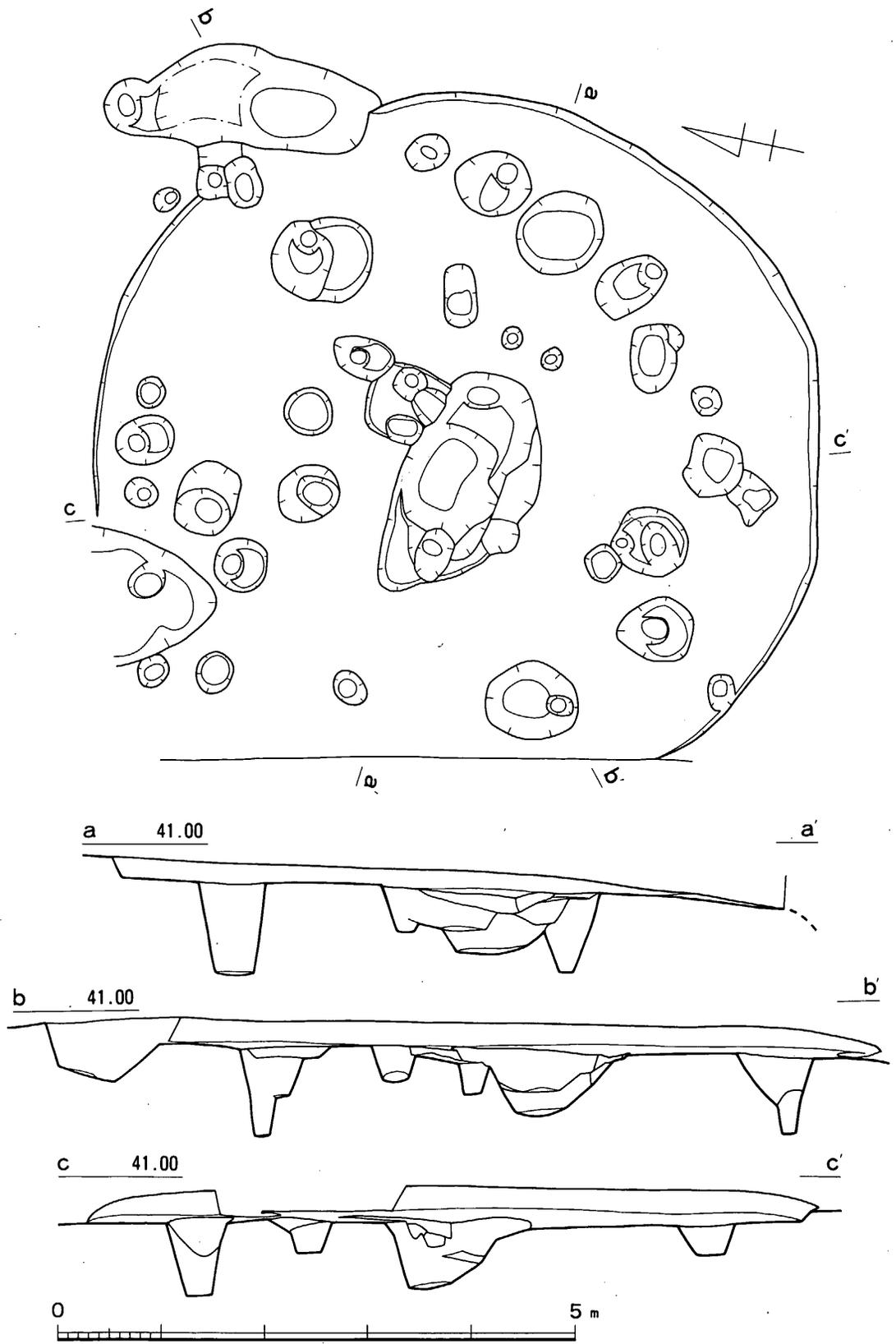
弥生式土器の小片が大半である。1～3は甕の口縁部の破片である。1は比較的大きなもので、逆L字状の形状を残しながらも、口縁部の傾斜は「く」字状となっている。口縁部直下には断面三角形の凸帯が1条巡る。2・3はほぼ「く」字状の口縁部で、僅かに3が古い要素を残す。4は甕の底部周辺で、平底を呈す。5は高坏の坏部片で、丹を塗布した痕跡を残す。口縁部は鋤先状を呈すが、端部は欠失する。口縁下には1条の断面三角形の凸帯が巡る。6は支脚の小片である。

(2) 石器（第6図／図版5）

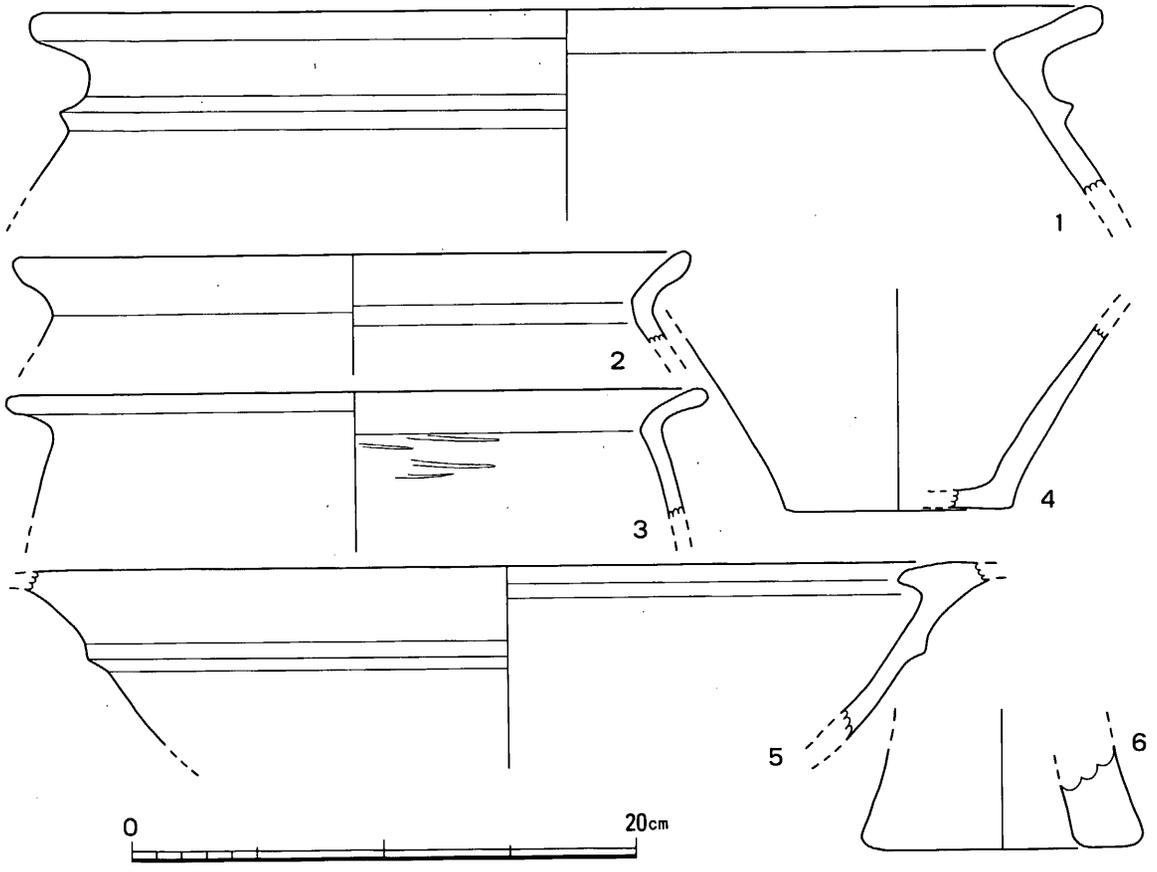
1はアクチノ閃石を含む陽起石片岩製の石剣の切先である。現存部は全長60mm、最大幅33mm、最大厚8mmを測る。2は凝灰岩の石包丁で、刃部の大半を失う。片刃の半月形外弯刃で、孔は径2.5mmを測り、両側から穿つ。3は礫質凝灰岩製石包丁で、一方の孔から折失する。両刃の半月形外弯刃である。孔は径3.5mmで両側から穿つ。



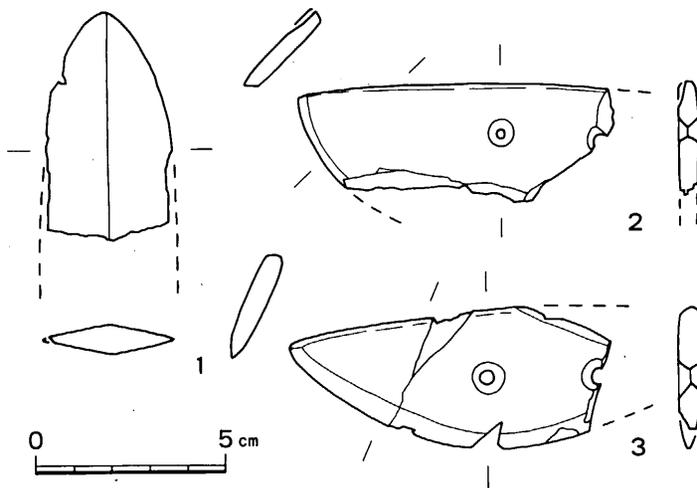
第3図 通り浦遺跡第2地点遺構配置図(縮尺1/100)



第4図 2号住居跡実測図(縮尺1/60)



第5図 2号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第6図 2号住居跡出土石器実測図 (縮尺1/2)

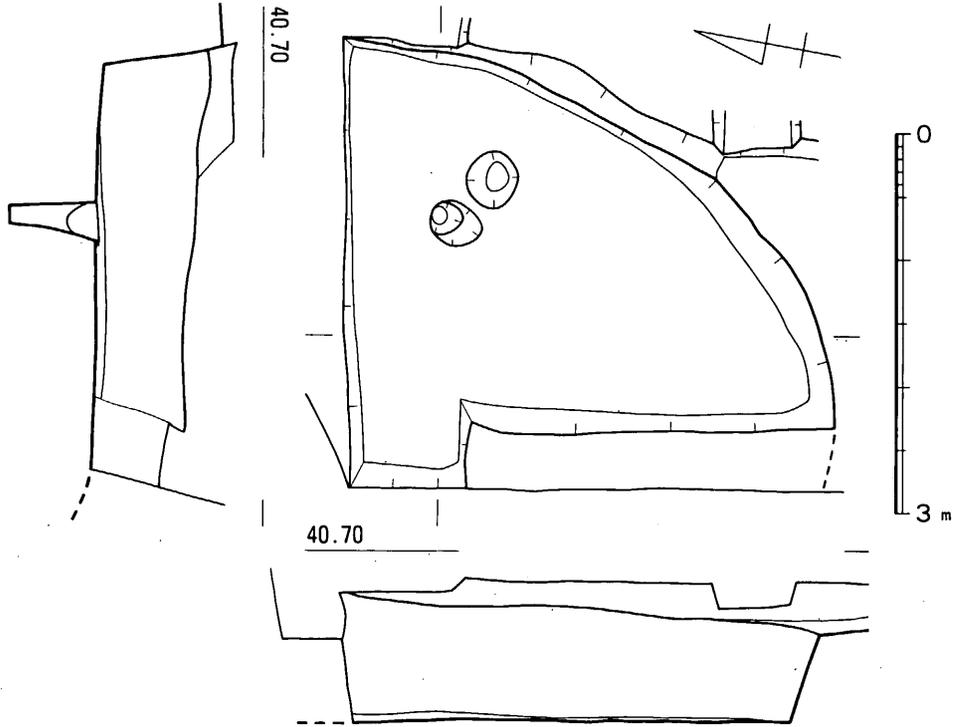
4. 3号住居跡

(第7図/図版4)

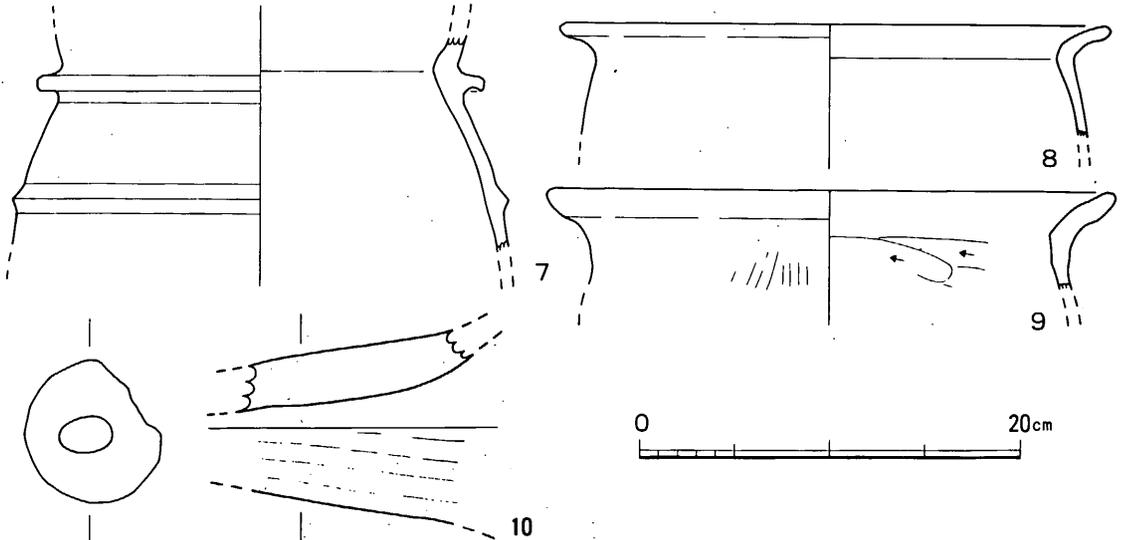
調査区の北側で検出した円形プランを呈す竪穴式住居跡である。住居跡の3/4ほどは段落ちで失われる。現存部分は残りが良く、壁高は最大1m余りを測る。遺物は土器のほか、鉄滓も出土した。

遺物（第8図／図版5）

弥生式土器の小片が大半である。7は甕の上に壺を接合するもので、外面に丹の塗布が見られる。8は「く」字状に近い口縁部を呈す甕である。9は土師器の甕の口縁部で、外傾して立つ口縁から胴部の一端が残る小片である。胴部内面には横方向のヘラ削りがみられ、外面には縦方向の刷毛目が残る。10は韃で、調整は明瞭さを欠くが、外面はヘラ状工具による調整痕を残す。



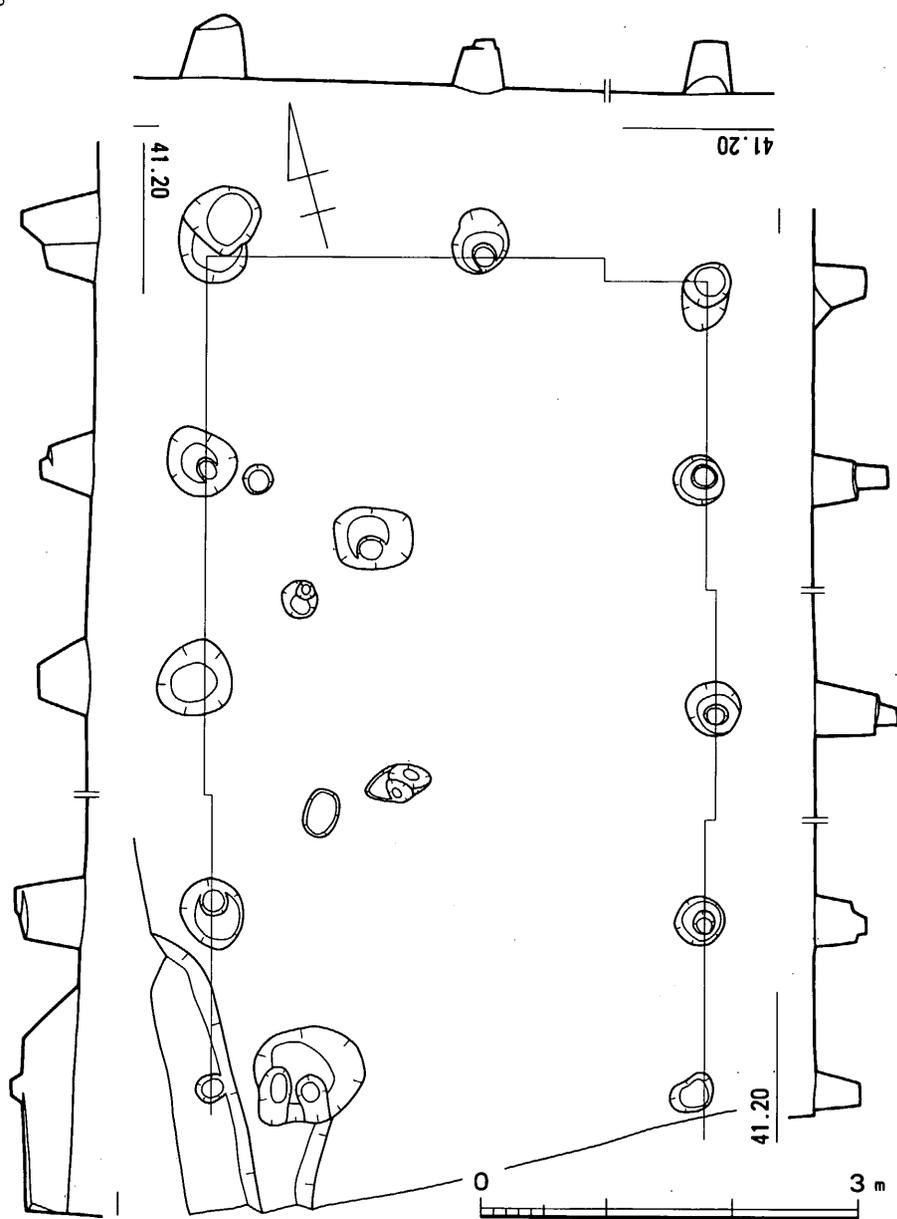
第7図 3号住居跡実測図（縮尺1/60）



第8図 3号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

5. 1号建物跡 (第9図/図版4)

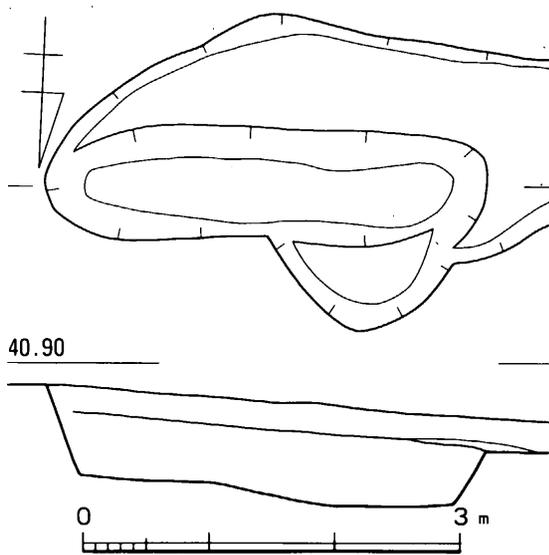
調査区の南部分で検出した。建物の一方は調査対象地外へ延びる。建物は主軸を真北から21.5°東へふる2×5間以上の南北棟で、梁行6.5尺、桁行5.5尺を基準とするが、最も南の桁行はやや短い。柱穴の並び方は不揃いで、掘り方は径40~60cm、深さ40~66cmでレベルは一定しない。



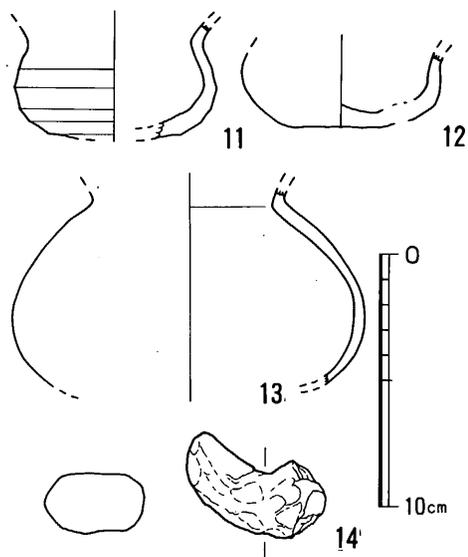
第9図 1号建物跡実測図 (縮尺 1/60)

遺物

1・4・5・7・9・10号ピットから若干の土器が出土した。大半が弥生式土器の小片であるが、4号に須恵器の坏蓋の小片、10号に同坏身の小片が各1点認められた。坏蓋はヘラ削りされる扁平な天井部をもつもので撮が付いていた痕跡を残す。坏身は外傾して立つ口縁部で、器壁は薄い。



第10図 1号土壌実測図 (縮尺 1/30)



第11図 溝状遺構・ピット出土土器実測図 (縮尺 1/3) 規則に検出されたが、1号土壌の南北には真

6. 1号土壌 (第10図)

真北から西に70°ふる長楕円形プランを呈す土壌である。壁体は真っすぐに下り、床面は平坦である。壁高は最大35cmを測り、土壌墓の可能性もある。

7. 1号溝状遺構

真北から東に11.5°ふる溝状遺構で、全体に削平され残りは悪い。現存最大幅90cmで、床面は遺構検出面と同様に南側へ傾斜する。

遺物 (第11図/図版5)

14は取っ手で、表面は荒れているが、ナデ調整されているようである。下部の接合部付近は表面が擦れている。大半は弥生式土器で、若干の須恵器が見られる。

8. 2号溝状遺構

1号溝状遺構に直交して検出され、真北から西に73°ふる。幅約80cmで、全長420cmほどを検出した。床面は西に傾斜しており、床の両端の比高差は46cmである。

9. ピット

ピットは住居跡や建物の柱穴を含め120ほどを検出した。前記のピットを除き大半が不

北から21°東にふる軸上に5つのピットが並ぶ。底面の比高差は50cm余りもあるが、一部は一つの遺構を形成していたかもしれない。

遺物（第11図／図版5）

遺物が出土したピットは30余りであり、大半が弥生式土器の小片である。11・12は2号住居跡を切る攪乱部から出土したものである。いずれも須恵器の埴で、体部外面は回転ヘラ削りされる。13は30号ピットから出土した無頸壺の小片である。

IV 小 結

発掘調査の結果、住居跡3軒、掘立て柱建物1棟が検出された。このなかでほぼ全容が確認できたのは2号住居跡のみである。2号住居跡は円形プランを呈し、中央に土壌をもつもので、支柱穴は5・6本である。中央土壌内の両端にはピットを有し、中間氏の言うところの発展松菊里型住居跡^{註1}で、筑紫野市脇田遺跡B地区4号住居跡^{註2}に類似する形態を見る。出土土器はいずれも小片であるが、弥生時代中期末頃に位置づけられよう。総じてこの形態を示す住居跡は弥生時代前期後半から同中期前半を中心に見られるが、谷頭遺跡2～6号住居跡^{註3}では黒髪式土器を伴い弥生時代中期後葉と考えられている。また脇田遺跡も出土土器は小片で時期を確定するには至らないが中期中葉～後期前葉までの時期が見られることなどから、このような形態をもつ住居跡は中期前半より上る事も考えられよう。以上のことも踏まえ、4号住居跡の時期は埋土出土土器の時期から一時期上って中期後葉頃に置くのが現段階では最も妥当であると考えられる。3号住居跡出土の遺物は時期幅が広いが、埋土上位からの出土である。下位から出土したものは弥生式土器の小片に限られる。掘立て柱建物は時期を確定しえる遺物は見られないが、上限として4・10号ピットの須恵器から奈良時代以降のものである。建物の向きが真北から東へ21°余りふり、直接的に大宰府条坊の規制を受けたとは考えられない。建物の時期、性格等を含め今後の周辺部の調査を待たざるをえないが、調査区北側で検出したピット列と同方位を示すのは興味深い。

註

註1 「松菊里型住居跡—我国稲作農耕受容期における竪穴式住居跡の研究—」 中間研志 東アジアの考古学と歴史（中） 岡崎敬先生退官記念論集 1987

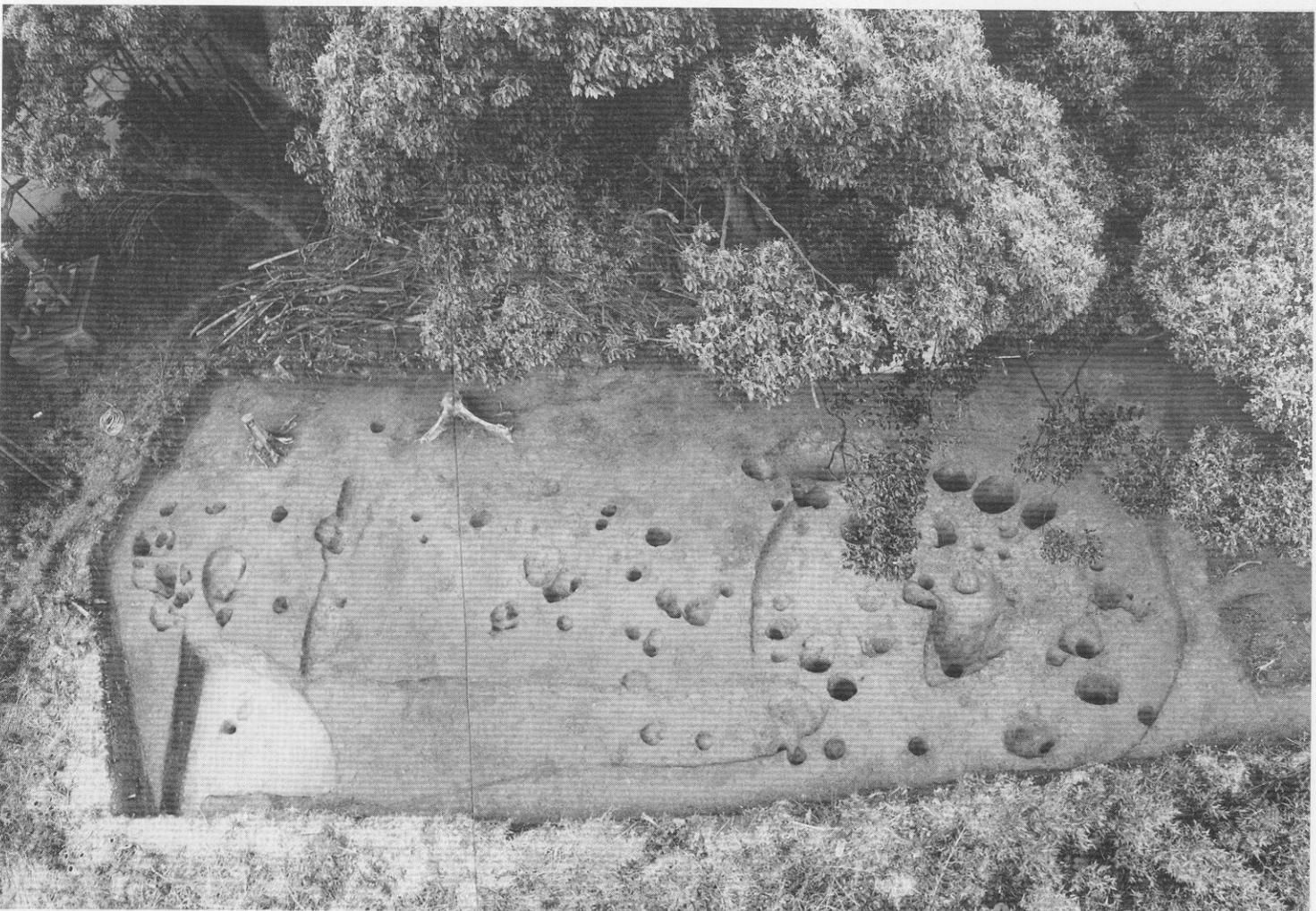
註2 「脇田遺跡Ⅱ」 筑紫野市文化財調査報告書第13集 筑紫野市教育委員会 1986

註3 「谷頭遺跡」 谷頭遺跡調査団 1987

圖 版



遺跡遠景



遺構配置状況

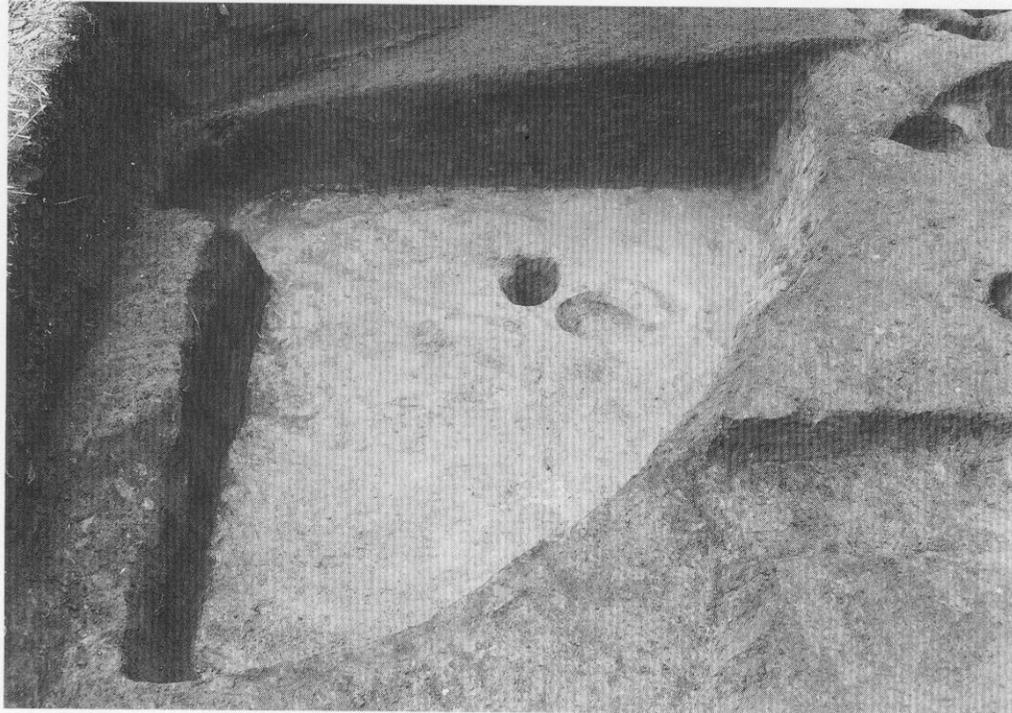


1号住居跡

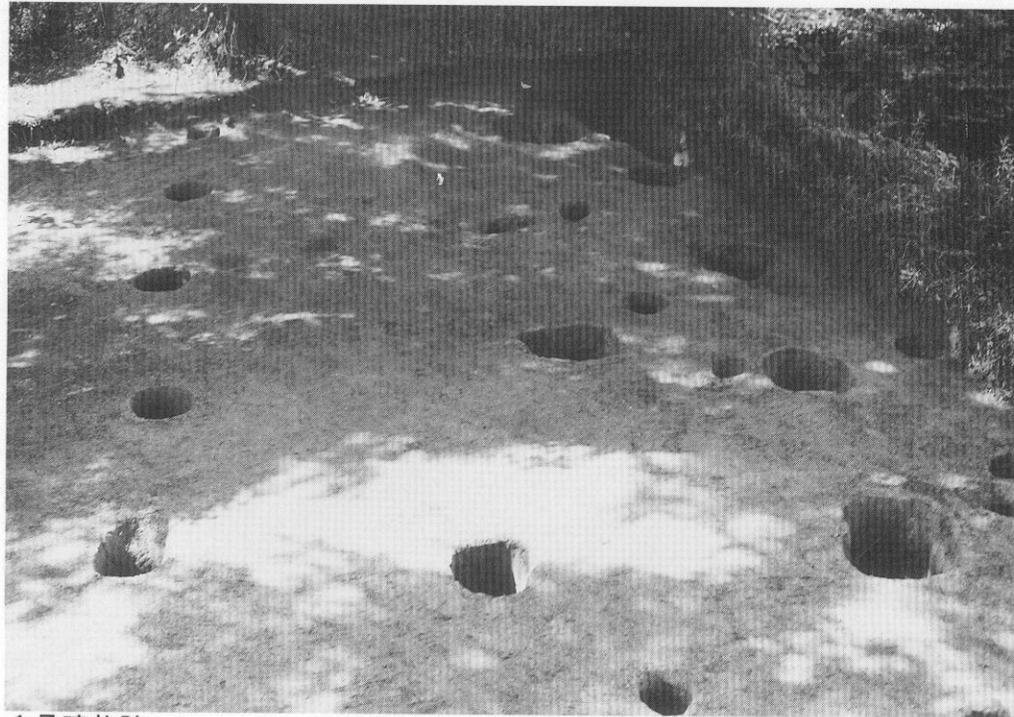


2号住居跡

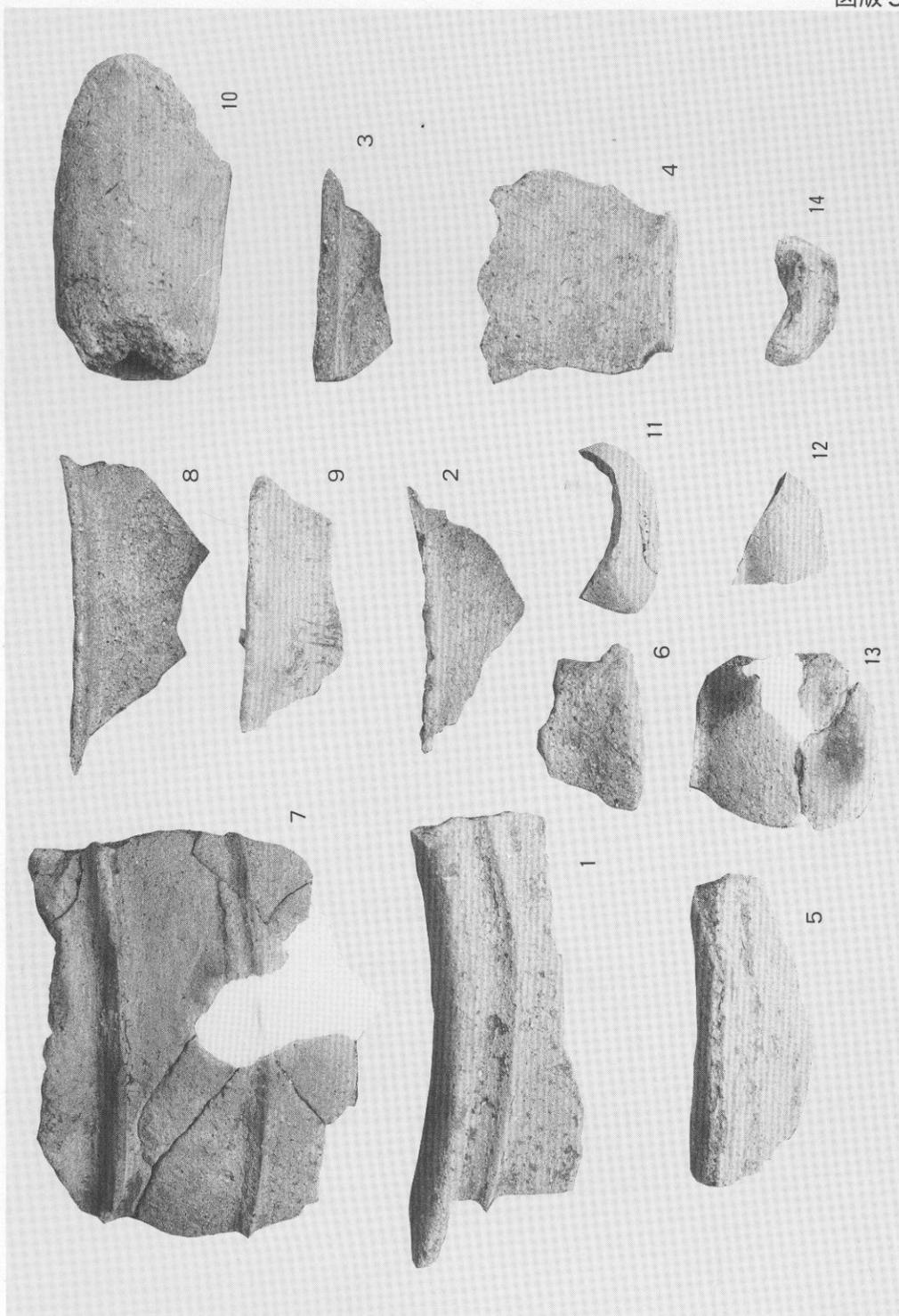
図版 4



3号住居跡



1号建物跡



出土遺物

通り浦遺跡Ⅱ

筑紫野市文化財調査報告書

第24集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41